

カナダの育児

- トロント日系社会における組織活動 と カナダの育児環境・社会的な背景について -

2005 年 11 月

三浦信義
トロント・カナダ

1. トロント日系社会の Baby Talks Forum (BTF)について

BTF はカナダ・トロント市を中心に、その近郊、さらにオンタリオ州南部で活動する、子育て・日常生活・家族問題に関して情報交換し助け合う日系社会のグループです。5 年前に 4 人で発足し、現在は会員 380 家族です。トロント新移住者協会の加盟団体で日本語で運営されています。

発足のきっかけは、インターネット・クラブ(これもトロント新移住者協会の加盟団体)の若い会員が結婚・妊娠・出産するにつれ、孤独感から、特に冬の鬱陶しい季節に狭いアパートでひとりで鬱病に陥る危険が見られ、その解決法として生まれました。E-mail フォーラムで情報交換しおしゃべりし、自分以外にも同じ状況の人達がいるんだ、と知ることによって問題の半分は解決すると思えました。会員の急速な増加がその効果を示しています。

会員主導型の活動で、会長や理事など肩書きのある会員はいません。世話人会がありますが、これは会員の希望・要望を吸い上げて、彼らの活動を下から支える役割を果たしています。

2. 組織運営の観点から

[*]トロントならではのユニークな環境

下記の要素が BTF の活動を助け、会員の結束を強くしていると思います。これらの要素はトロント特有のものであり、日本で同じような活動をする場合、それに代わる要素を見つける必要があると思います。

- トロントの日系社会は小さく、かつ日本語を話す日系人はさらに少ない。日本語での話し相手が欲しい。
- 会員の多くはカナダへ移住・駐在してからの年月が少なく、生活上分からないことが多い。
- 家族やそれに代わる人達がカナダにいない、妊娠・出産などすべて自分で対処せねばならない。
- カナダと日本では育児観念・医療システム・教育システムの違いがあり、情報が必要。
- 異国の地で暮らしていて、ひとりだと孤独感・不安がある。

このような状況の中で、日本語で話せ、情報交換が出来る BTF のような組織がマグネットのように人を集め、かつ会員の心や生活のよりどころとなるのはむしろ自然の動きと見る事が出来ると思います。

[*] 会員の結束・相互援助の空気を作る工夫

上記のような環境があっても、それを後押しし、さらに膨らませる工夫・努力がないと、効果的な成長は望めないと思います。その為に下記のような工夫をしています。

- 必ず本名で登録、本名で投稿

これは不特定多数の会員が匿名で投稿することが出来るフォーラムが持つ弊害を除く為です。本名で投稿することによりその内容の信憑性が高まるだけでなく、会員同士の親近感が高まります。

- 会員は出来るだけトロント地域、カナダ、または日本在住でカナダへ移住・駐在準備中の人達だけに限定する努力。

広く宣伝することはせず、入会希望は現在殆どがロコミやトロントの日系社会の援助組織からの紹介です。会員同士、お互いに手が届く距離にいる、会いたければ会える、集まりたければ集まれる、気心の知れた友達同士といった空気を保つためです。

- 会員以外には非公開

会員以外に非公開にすることにより会員が友達や家族に話すように安心して心の中を話すことが出来ます。

[*] 会員主導型の組織の工夫

- 「組織は生き物」の概念

BTF の存在目的は基本的には妊娠・出産・育児に関してお互いに助け合うことです。しかしこれは BTF が生まれた動機であって、BTF が常にそうである必要はありません。

従って BTF の活動に定義や mission statement などはありません。会員の必要に応じて BTF は柔軟に対処し、その時その時の需要に応じて変化すべきという考えからです。10 年後の BTF が今と全く違う目的の組織であっても、それがその時の会員の必要を満たすものであればそれでよいのです。

実際、BTF 誕生以来 5 年、現在は育児から、さらにその先の教育に関心が広がっており、日本語学校説明会、バイリンガル講演会、カナダの教育システム説明会などへと活動が広がっています。やがては家族、(国際)結婚、離婚などの問題にも関心が広がることは明らかです。Baby Talks Forum の名前が活動内容からふさわしくなくなってきたので、Family Talks Forum (FTF)への名前変更がほぼ決まっています。

- 役職不在

BTF には会長、書記、理事、事務局などという肩書きの付く会員はいません。いるのは世話人だけです。世話人も表に出ることはなく、会員の意向を汲んで、必要に応じてそれを実行する助けをするだけです。従って会員から希望・要望が出なければ何もしません。

「組織は生き物」である為には会員が主体でなくてはなりません。BTF では世話人達は会員には通常見えません。会員を下から支える立場に徹底しています。つまり会員の上には誰もいない訳で、自然に会員が動かす形になります。

これは心理的なものもあり、仮に「名目だけ」の会長や理事を置いても、そして彼らが実際には何もなくても、それだけで弊害が出るでしょう。やはり「誰がいる、誰かがやってくれる、誰かが決めてくれる」的な空気が出来てしまうと思います。

- 専門家の立場

BTFには妊娠・出産・育児の専門家がいます。BTFが参加をお願いした人もいますが、これだけ会員が大勢いると自然に専門家も揃ってしまいます。

専門家は、会員同士の自由な情報交換が続いたところで、あるいは誰も分からず困った場合に、補足や情報提供をしてもらっています。これも上記同様、BTFが会員が専門家に解答を求める一方通行の「コラム」になる危険を避ける為です。会員の「なま」の経験や解決方法は大事な生活情報です。その為にも会員主導の環境は大事です。

- 自由な組織の強さ

会員同士に親近感が生まれた時点で、かつBTFが大きくなり過ぎて全体でやる行事が難しくなり、全体の親睦会は年2回に限定した時点で、各地域にplaygroupsが自然発生的に沢山生まれました。毎週公園に集まったり、図書館遊戯室に集まったり、遊ぶ施設のあるレストランに集まったり、個人の家で歌や遊戯をしたり、それぞれ工夫をして活動をしています。こういう必要性が出てきた時点で、自然のリーダーが生まれるものです。

そういうリーダーシップを取れる人達を世話人をお願いしている内に、世話人の数は17人にもなっていました。彼らにはそういう素質があり、自分達で動いてくれます。ここにBTFの自由な組織の強さがあると思います。

[*] 負担にならない

- 会員であることが負担にならないこと。

BTFは無料ですし、会員登録しても何もなくて良いのです。必要な時に必要に応じて利用したり参加する。全く何もせず、情報だけを利用する会員も多いですし、それで良いのです。

- 自由参加・退会

「誰でも歓迎、去るものは追わず」。無理に勧誘しない、引き止めない。(自分でinternetで退会できます)。組織運営において大事な理念と思います。

- 「子育て支援」という言葉

日本で使われている「子育て支援」という言葉には「他力依存」的な、「上から誰かが助ける」的な雰囲気を感じられ、好きな言葉ではありません。BTFは英語ではself help group、日本語に無理に訳すと「相互援助」でしょうか。

[*] 組織運営の観点から - 結論

結局、種がなければいくら水をやっても何も育たない、また、種があっても水のやり方を間違えると育たない、ということでしょうか。

組織しようと思う対象がどのような需要・必要性を感じているかを的確につかみ、それを彼ら自身の力と動機で掘り出して目に見えるものにして行く。無理に方向を決めない。難しいことですが、それが大事だと思います。

需要の波に乗った組織・活動は放っておいても膨らみますし強いです。それはいろいろな組織を創設・運営した私の経験からはっきり保障します。

3. 社会環境の観点から - 家族に優しい社会

育児活動は社会の生活環境、職場環境、さらには生活上の価値観などに大きく左右されると思います。この点で、カナダは日本に比べ育児のしやすい環境にある、と良く言われます。

もちろん、カナダにもいろいろな人がいて、いろいろな状況があります。例えば父親の育児にしても、日本の父親より何もしない父親がカナダにもいるでしょう。日本にだってカナダの一般の父親よりはるかに子育てをする父親がいるでしょう。でも、社会全体の平均的価値観がどこにあるかを見れば、カナダ社会の方が家族を自然に当たり前にする社会感覚があります。これは駐在経験者、特に育児中の主婦は帰国したがる人が多いことから伺えます。そして社会の影響は大きくて、BTF 会員の日本人の父親を見ていると、こちらの社会の感覚で自然に子育てをしているのが嬉しいですね。

以下は日本社会とカナダ社会のこの「平均的価値観・環境」の違いについて述べてみます。(そうではない人達や状況もあるということを念頭において下さい)

[*] 家族を優先する社会観 - 仕事は仕事、終われば自分の時間

カナダには家族を大事にする社会感覚・社会環境が日本より強く、育児もそういう家族を大事にする感覚の中にあります。たとえば:

- カナダの政治家や大会社の社長が自分から辞める時に言う言葉を知っていますか。家族と過ごす時間がなかったから、家族との時間が欲しいから、です。メディアはそれで納得します。(他の理由でも言おうものならいろいろつかれます) 日本ではそういうことを言う人は殆どいないのではありませんか。
- カナダでは仕事が終わってから出かける時は一度家に帰り、wife・husband と出かけます。良いレストランなど男同士では行きにくいです。日本ではどうして飲み屋やスナックなどがあり、かつ繁盛するのでしょうか。仕事の後どうして家族抜きの人達がそういうところに沢山行くのでしょうか。さらにどうして男性を女性がサービスするようなどが沢山あるのでしょうか。それを疑問に思わないのでしょうか。家族はどうなってしまっているのでしょうか。

[*] 家族内の男女平等の感覚とそれを支える社会制度

上記は社会感覚と社会制度に関係すると思います。

- 社会感覚: 日本のある新聞記事にありました。子供を持つ日本の母親の多くは父親の子育て・教育への関与を望まない、期待しない、だそうです。「母子」手帳であって「親子」手帳ではないですね。また、男性も一般に仕事や会社が家族よりも優先する状況がありますね。日本には育児は女性がするものと始めから決めているものが多くある気がします。育児は家族単位であるという意識の欠如が見られないでしょうか。
- 社会制度: 本籍、戸籍、住民票。結婚すれば「籍を入れる」という行為(=どちらかがどちらかに属さねばならない、という考え)。しかも苗字も同じにしなければならない。そういう制度を通して慣例的に「女性が男性に属す」。それを日本の社会はおかしいと思わないのでしょうか。それが日本の男女の育児に対する姿勢に影響していないのでしょうか。

- カナダにはそういう物がありません。結婚しても男女は平等です。社会ではそれぞれ独立した人間です。苗字もそのまま別称に出来ます。私と wife は苗字が違います。結婚したら女性は仕事を辞めるといった考えもありません。

[*] 「制度」は手段、「目的」は社会環境・家族の価値観であるべき

日本の少子化対策の記事など読むと、見当はずれだなあ、と思うことが良くあります。社会制度とか職場制度など、表面的な、しかも上からの対策が多いように見えます。

適切な制度が意味を持つ為には、それを活用することが自然であり、常識である社会環境が必要です。社会にそれらを当たり前を受け入れる常識があって初めて制度は存在意味・存在価値のあるものになります。そう言う意味で、日本社会の社会環境・価値観には問題点があると感じています。

例えば、現状の有給休暇すら全部使わないという感覚が日本社会にある限り、カナダ並みに有給休暇をもっと増やしたところで意味がないですね。また日本は長時間労働と言います。でもカナダも日本も就業時間は5時で終わりですね。カナダでは皆帰ります。制度は同じなのに、現実はずいぶん違いますね、なぜなのでしょう。

[*] カナダの職場の制度とそれを自由に活用できる環境

- 残業： 残業は特に忙しくない限りしません。5時以降は自分の、そして家族の時間です。また、多くの会社はフレキシブルタイムです。私の会社では朝7時から9時の間いつ始めても良いのです。早く始めればその分早く帰ります。
- 有給休暇： 私は今、年に33日の有給休暇があります。週5日勤務ですから6週間以上の休暇です。皆、全部使います。足りなくなって翌年の分を前借りする人達もいます。また少なくとも1週間はまとめて取ることが推奨されています(私は去年は1ヶ月休んでオーストラリアを旅行しました)
- 病欠休暇： 有給休暇とは別には病欠休暇が(私の場合は)年に9日あります。病気なら休んで当然。インフルエンザなどの場合は感染したくないので皆が帰れ帰れと圧力をかけます。使っていない分は繰越されるので、私は今150日ほど病気で休めます。
- 医者(定期検診を含む)や歯医者は勤務中に行きます(夕方はやっていないことが多い)
- 産休は女性・男性の区別はありません(かなり前に制度の中の性別をすべて取り払ったのだと思います)。お産だけでなく小さな養子を貰った場合も使えます。
- 家族に問題があるような場合は、家族の問題をちゃんと処理して会社で安心して仕事ができるような状態で会社に来よう職場の誰もが助けてくれますし、誰もがそれを活用します。これは制度ではなく職場環境です。
- 日本からの訪問者が驚くのは、職場での上下関係が感じられないことです。お互いに友達のように仕事をしているからです。こういうようなことは制度を調べても分からない要素ですね。

[*] 健康保険・医療制度—無料

- カナダでは出産は基本的には無料です。書類の手数料を取る病院が出てきてはいますが、妊娠中の検査から産後の看護婦自宅訪問まで基本的に無料です。

- カナダの健康保険・医療制度はすべて州立です。病院もすべて州立です。国民・永住権保持者は自動的に加入します。医者も病院も州の保険でまかなわれています。ただしその分この国は税金が高いのですが。
- 私は全身麻酔の手術を2回していますが、初診、検査、手術、事後検診、看護婦の自宅訪問まですべて無料でした。
- 健康保険・医療制度のみならず、社会福祉・失業保険、年金制度・無料教育まで、カナダは民主社会主義を政治の基本としています。資本・個人主義の米国とは180度考えの異なる国です。

[*] 教育に対する観念の違い - 子供にとっても優しい社会

日本社会の教育観念・進学制度が育児に無意味な圧力をかけているように思えます。

- 教育観念:カナダでは良い学校、良い大学、良い会社の観念がすべてではない。

子供はりんごであってもみかんであってもブドウであっても良い訳でしょう。日本ではどの子供もりんご(良い大学、良い会社)でなくてはならない、しかもベストのりんごでなくてはならないという観念が強すぎる気がします。その子がりんごかみかんかブドウかまだ分からない内にりんごに育てようとするようなものです。

カナダの親には子供の素質を伸ばす姿勢があります。その子がみかんなら、ベストのみかんであれ、という考えです。スポーツ、音楽、バレエ、芸術などいろいろあります。ただしこちらの親は子供の素質になると、日本の教育ママ・パパ顔負けの熱心さで、ちょっと異常と感じるケースも多いですが・・・。

- 進学制度:公立・無料(高校まで)・無試験(大学)

小学(8年生まで)・高校(12年生まで)は殆どが公立で無料です。私立は非常に少ないです。高校では昔裕福な家庭の子供達が行っていた由緒ある学校が私立として残っています。

小学校は子供は宿題とそれに関係する本だけ持って行き来します。学校に教科書などすべて置いてあります。教科書は学校提供で買う必要がありません。小さい子供達は帰宅すれば道でホッケーや自転車、裏庭で近所の子供が集まってキャーキャーです。学校の夏休みは7、8月の2ヶ月間です。新年度は9月からなので宿題など何ともありません。(大学の夏休みは5月から8月まで4ヶ月間)

高校は4年間で、クラス制ではなく、自分の選んだ科目の教室に移動します。高校は日本の大学の雰囲気があり、高校で日本の大学のような楽しく有意義な社交生活・学生生活を送ります。部活動からフォーマル(ダンスパーティ)、学校をあげてのフットボールの対校試合など。高校の卒業式はたぶん結婚式に次ぐ人生で大事な行事と思います。そのせいでしょうか子供が早く大人になります。日本のような親の過保護は一般に見られません。大学生になると社会人とみなされます。

カナダ第一の都市 Toronto に大学は3つ。そのうち総合大学はたったひとつ。残りは文理大学と工業大学です。カナダには私立大学はなく、すべて州立大学です。高校卒業後に行く Community colleges と呼ばれる公立専門学校が沢山あります。早く技術を身につけ、早くお金を稼ぎ、別荘とヨットを買って、早くリタイアすることを目指す人間も多いのです。

大学は入学試験がありません。高校での科目の成績、部活動、社会活動、教師の評価などが入学審査の対象になります。大学は名実ともに勉強するところです。私はトロント大学工学部で修士を取りましたから、日本の大学との違いを身をもって経験しています。

大学は無料ではありません。大学生は長い夏休み(5月から8月まで4ヶ月間)にお金を稼ぎます。政府や会社はそういう summer students を積極的に雇う体制でいます。またいろいろな奨学金があります。私は在学中授業料はすべて政府が出し、卒業後半分を無利子で返済しました。今トロント大学工学部在学中の息子は1年目はすべて奨学金(返済不要)で教科書までまかさないました。

[*] 良いことばかりではない

- カナダ社会は日本に比べ貧富の差が大きいです。社会福祉・失業保険が充実し、健康保険も学校も無料で、ゲットーなどありませんが、それでも貧困の子供は社会の底辺で暮らすことになりいろいろな面で不利な思いをし、それが社会に有形無形のひずみ(犯罪を含む)を生み出します。
- 日本から子育て情報の依頼を受ける度に、カナダの子育ては楽である、それも制度が整っているから、と決めている姿勢が感じられます。子育てはどこでも大変です。BTF 会員に聞けばひとり残らずそう言うでしょう。その大変さの程度がいろいろな部分でカナダの方が多少楽である、というふうに見て欲しいです。
- 日本的な教育観念がカナダの、特に都市部に広がりつつあります。公文などがその良い例です。東洋系、特に中国人、韓国人の間での教育競争は日本のそれよりも激しいかもしれません。ただし子供達はカナダ社会の中で育つ過程でカナダの社会観念に染まって行きます。三世にもなれば完全にカナダ人です。カナダの社会が日本のようになることはないでしょう。

4. おわりに

日本から Canada へ短期間来る人達はよく Canada のサービスの悪さ、遅いこと、効率の悪さなどに苦情を言います。しかし我々 Canada に住んでいる人間にとって、それらが特に生活の支障になってはいません。この感覚の違いが日本で子育て問題を考える行く上で考慮する必要のある要素ではないかと感じます。

JR 西日本の電車の事故にこちらからは上記の要素が見えました。日本社会の「便利で早い」ことが良いという固定観念が JR 西日本を走らせ、運転手を走らせ、その運転手も仕事が終われば、どこかで誰かを走らせ、その誰かもどこかの職場や店で「便利で早い」ことを要求し、その職場や店の人も「便利で早い」ことを要求して JR 西日本を走らせる。終わりのない悪循環。家族に優しい社会を作るには、この悪循環の破壊が必要ではないか、と感じました。

最後に、私は息子を6歳から16歳まで10年間 single father として育てました。会社ではそれが問題になることもなく仕事を十分こなし、いろいろな賞や特許を取り、今は senior engineer です。また息子は立派に育ち、今年10月に福岡で開かれた国際航空宇宙学会に学生として出席しました。Canada の制度・環境・社会が日本よりは家族に優しいことを、この事実がどんな議論よりも証明していると思います。

三浦信義 (Nobby Miura) M.Eng., P.Eng.
Senior Engineer—Kinectrics Inc., Toronto, Ontario, CANADA
BTF 世話人
インターネットクラブ世話人
トロント歌声喫茶の会世話人
新移住者協会ヴォランティアネットワーク世話人
トロント新移住者協会理事 nobbym@idirect.ca